



楓の誉

R5.9.29(第6号)
文責: 瀨上 佳宏

「やり方」が重要となる時代

令和五年度の前期も残すところ来週の1週間となり、五日間の秋休みを挟んで、後期の教育課程が始まることとなります。さすがに猛暑も収まり、「○○の秋」を迎えます。さて、皆さんは○○に何と入れますか？ 進路選択を控えた三年生は、望む・望まざるにかかわらず、「勉学の秋」となるのでしょうか。

ところで、学校便りの先月号に、「全学調における本校三年生の高い学力は、『楓の森中メソッド』が効果を発揮したから」という旨の記述をしていました。その後、これを読まれた数人の校長先生や教育関係の方から、「楓の森中メソッドとは何ぞや？」というお尋ねをいただいたところでした。紙面が足りないもので、ここでは説明しませんが、開校以来、私(校長)が発行してきた学校便り(全て本校HPから閲覧可能です)をお読みいただくと、その肝はご理解いただけるかもしれません。

今回、話題にしたいのは、私が「メソッド」という言葉で表現したことです。私がこの言葉を認識したのは、今から二十年前、PISA(AOEC D)による国際的な生徒の学習到達度調査)の結果において、日本の学力低下が騒がれる中、世界一の学力を持つとされたフィンランド教育が注目されていた時期です。ここでは「フィンランド・メソッド」という言葉が使われ、具体的には、読書率の高さ、国の福祉が支援する教育の平等な機会の保障、少人

数学習やきめ細やかな個々への支援による低学力層の底上げ、質の高い教師と教師が働きやすい職場環境などが挙げられていました。また、競争を捨て、「ゆとり」を重視したことによって、世界一の学力につながったと評価する識者もいました。その一方、日本では「ゆとり教育(文部科学省が指定した正式な名称ではない)」によって、児童生徒の学力は低下したというのが一般的な見解です。結局のところ、「ゆとり」そのものが悪いのではなく、生み出した「ゆとり」をどのように使うのか、つまり、「やり方」メソッド」を考えなかつたからではないかと、私は思っています。

少し話は変わりますが、「メソッド」は、ICTの分野でも用いられる言葉です。専門的な説明は置いておいて、とにかくコンピュータプログラムというものは、外部からの指示で「メソッド」を実行し、その目的を果たすことができます。近年、学校で重視されるようになってくるプログラミング教育は、まさしく子供たちに「メソッド」やり方」を考えさせる教育と言つてよいでしょう。それゆえに、プログラミング教育は、大人になってICTに関連する職に就こうと思つていない生徒にとつても、大事な教育だと言えるのです。

Society 5.0と呼ばれる未来社会を生きる生徒たちは、「他者から言われたようにやる」や「周りと同じようにやる」ではなく、自分がいる環境に最適化したやり方や、自分が持つ資源を最大限に活かすやり方を自身で考え、自己の責任で実行していく、そういう力が必要ではないかと思つています。教職員もまた然り。例えば、全児童・生徒に貸与されたタブレット。その効果を学力面で発揮できるか否かもその「やり方」次第ですし、本校教職員は、自分たちでそれを考え、実行しています。

熊日新聞を購読されている方は、九月十五日(金)の朝刊一面に載っていた「菊池恵楓園入所者と交流本格化」という記事をご覧になられましたでしょうか？ コロナ禍を越え、開校三年目にして本校の人権学習が本格化してきたという内容でした。このように本年度は、「協働」と「貢献」をキーワードに、菊池恵楓園をはじめ、学校外の様々な組織や人と連携・協働しながら、地域貢献・社会貢献を通じた教育の充実に努めています。

今年度だけで終わらせないために

先週は、ハンセン病問題学習を中心に作成した合志楓の森中の紹介ビデオを、鳥栖西中の全生徒に視聴してもらったことを受け、第二回目のオンライン交流を行いました。さらに本日(二十九日)は、

菊池恵楓園内で行われる慰霊祭において、本校のボランティアの生徒たちが製作した「慰霊竹灯り」が会場に飾られ、火入れ式が行われます。おそらく幻想的で美しい光の芸術が見られることでしょう。

このように活動が充実してきた背景には、生徒たちの頑張りに加え、本校の担当教職員が、関係する学校外の皆様と繋がりをもち、緊密な連携を図ってきたことがあります。

菊池恵楓園で打ち上げられる綺麗な花火は、本校舎から毎年見ることが出来ます。本校が行っている「協働」や「貢献」も、今年度だけの打ち上げ花火に終わらないよう、誰が担当者になっても続けていける体制に整えていきたいと思います。



心を込めて竹灯りを製作



学校HPのQRコード